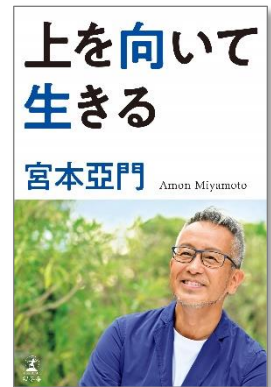


● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

上を向いて生きる
宮本亜門 著 幻冬舎 2020年10月初版



はじめに

ウィズ・コロナはまだ続きそうです。皆さんの心の健康状態はいかがですか。ワクチン接種が進み、「見えない恐怖、不安、不快、いら立ち、怒り」が少しは減ったのではないのでしょうか。でもこれから、新たな感染症が生まれる可能性があります。そんな時こそ、坂本九、九ちゃんの、「上を向いて歩こう」を口ずさんでみましょう。

『上を向いて歩こう 涙がこぼれないように 思い出す 春の日 一人ぼっちの夜月
上を向いて歩こう にじんだ星をかぞえて 思い出す 夏の日 一人ぼっちの夜
幸せは雲の上に 幸せは空の上に
上を向いて歩こう 涙がこぼれないように 泣きながら歩く 一人ぼっちの夜月月』

思い出す 秋の日 一人ぼっちの夜
悲しみは星のかけに 悲しみは月のかけに
上を向いて歩こう 涙がこぼれないように 泣きながら歩く 一人ぼっちの夜 一人ぼっちの夜月』

著者の紹介；宮本亜門（みやもと・あもん）

1958年東京都生まれ。87年にオリジナルミュージカル「アイ・ガット・マーマン」で演出家デビュー。2004年、東洋人初の演出家としてニューヨークのオンブロードウェイにてミュージカル「太平洋序曲」を手がけ、同作はトニー賞の4部門でノミネートされた。2019年、がんから復帰した時、亜門から亞門に改名。「人はいくらでも変わることができる。どんどん変えて、なりたい自分になろう」と。

本書の内容・感想

本書のテーマは大きく3つ。コロナ渦で立ち上げられた「上を向いて歩こう」プロジェクト、「前立腺がん」、そして、「自殺」である。

まず、「上を向いて歩こう」プロジェクト。本書より、抄出する。

『一今だから、人への想像力で世界は繋がれる。人を思う心は希望の光一。「新型コロナウイルスとの闘いは、かなり長期戦になりそうだ」。2020年3月。ブロードウェイでの公演も中止。日本の公演も相次いで中止。普段、舞台を観ない方々には、私達のやっていることは、不要不急なことに見えるかもしれない。でも、だからこそ、アーティストが人を勇気づける存在であることを今、証明したいと、4月2日にYouTube上で名曲「上を向いて歩こう」を歌や踊りで繋ぐプロジェクトを立ち上げた。最初は、著名人達に電話でお願いした。反応は十人十色だった。次に、一般の方々も歌を吹き込めるように、YouTubeで音源を公開。たった4日間で、600人以上の方々から応募があり、正直ビックリした。また送られてきた映像を見て、皆さんの心のこもり方には涙が止まらなかった。私はただ「医療関係者の皆さんや、感染に怯えて部屋にいる皆さんに語りかけて下さい」とお願いしただけなのに、「人は、出会ったこともない人達を、こんなに思えるのか」という衝撃だった。皆さんは歌を送る相手を想像して、言葉一つ一つがまるで言霊(ことだま)』



のように染み入るように歌いかけてくれた。

正直、歌が上手な人だけで聴きたかったという意見もあった。でも今回の目的は「心を伝えること」。ですから、著名人と一般人を混合して、同じ愛(いと)おいしい人間達の歌として編集した。

新型コロナウイルスは、家族や国を分断させた。でも、私達人間の想像力は、お互いを繋ぐこともできる。まさにこのプロジェクトは、一緒に乗り越えようという連帯意識による、希望の光そのものだった。』

次が、「前立腺がん」。『私は、演出家という仕事を通じて「人間とは何かを」を常に自分に語りかけ、生きてきた。2019年、前立腺がんを患った。出演したテレビ番組で前立腺に影がみつかったのが4月。告知を受けた瞬間「まさか自分が」と目の前がクラツときて、その後、前立腺の全摘出を選択するまでがひと月あまり。余りの孤独に死をも覚悟した。

でも、幸い手術は成功。多くの人の優しさで、なんとか普段通りの生活に戻ることができた。還暦を迎えての闘病に、この歳でできなくなることもあるんだと実感した一方、まだ生かされていることで、できることが沢山あることを教わった。』

『—できなくなったことを悔やまず、できることを思う。老いは退化ではなく進化—。

退院して、家に帰り、神棚の母の写真に「ただいま！」と挨拶して、ベッドでリラックス。ふと、パンツの中を見て驚いた。うわあ、本当にボッキなし…。

私のあそこ(陰茎)は、魂の抜け殻のようにダラリ。「おい、起きろ」と心の中で叫んでみるも、うんともすんとも動かない。頭でわかっている、心が納得していない変化。つい、また神棚の前に座って母に「どうしよう」と呟いた。

小学校の時以来、ずっと付き合い、同志のような存在だったのに。私に男であることを知らしめ、自信を与え続けてくれた同志が、術後は男の象徴などお構いなしで、ダラリと寝そべったまま。そしてあろうことか、みるみる小さくなっていく。嘘だろ！ さすがに慌てた私は、のちにこれが全摘術後の合併症であると知った。金沢大学の調査報告によると、陰茎は平均2センチ縮み、1年程したら元に戻るとか。ホツとした。

正直、ボッキなしは、場合によっては存在意識の低下や自信喪失になるほど、男の精神面に打撃を与える。退院してからは、尿漏れ予防にパッドも着けていたので、私は、一気に体が老いた気分になった。

特に前立腺がんの合併症で起きる尿漏れは、女性に最も多いとされる咳やくしゃみ、大笑いした時に起きるそれと同じ。私は稽古中、よく笑う。笑うことで雰囲気を変える。だから漏れる、漏れる。何度、稽古中にパッドを変えたことか。それに集中するあまり大声を出して、腹部に力が入った時なんかもう…。自分の意思とは関係なくガンガン漏れる。

(中略)術後しばらくは、体は、借り物のような気分で、人間としてまだ復活していないように感じていた。でも「ちょっと待てよ」とある日考えた。

もし尿漏れが治らなかつたとしても、これを習慣化しておけば、老後に役立つはず。どうせ誰もがいつか着けるパッド。早めにマスターしておけば、抵抗感もなくなって後が楽になる。これは私にとって大切な試運転だった。

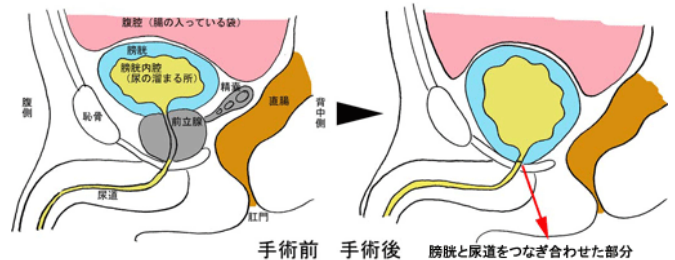
人は誰もが一日一日と、老いていく。みんな体のあちこちが徐々に低下していく。その中で、失った体の部位や機能に執着していたら、今、生きてることが苦しくなるだけだ。これは劣化などではなく、日々の新しい変化。それも退化ではなく進化。まさにニューノーマル。神様がくれた贈り物と思えるようになった。

これを楽しみにするか、過去と比較して悲しむかは自分次第。ならば、できなくなった体の動きに焦点を当てるのではなく、自分がやりたいことに心を傾けて再出発する。新しい体とともに死ぬまで成長！人生二度なし。残りの人生、楽しまなきゃ！』

最後に、すべての人の人生に、通底することだと思うので、「おわりに」より抄出する。

『それでも悲しいことに、自殺という究極の選択をしてしまう人がいる。私も高校生の時から自殺を真剣に何度も試みただけに、その時の気持ちはわかる。でも、今は、生きていて本当によかったと思っている。あの時は「これしかない」と思い込んで悩んだことが、後にどれほど狭い視野で、小さな世界の中でしか考えていなかったのか、気づくことができたから。(中略)

あなたがいつ死ぬかは、神のみぞ知る。誰でもいつかは死ぬ。どうせ同じように死ぬんだったら、ジタバタせず、大いに笑って、楽しんで、やりたいことをやって、徹底的に生きてみないか？



弱気になった時に、宣言しよう。「生きて！ 生きて！ 上を向いて生きる！」  
そして、人生の幕を閉じる時、大きな拍手で、お互いを送り出そう。それまで、いつまでも幸せに。お元気で。』

理事 井上 林太郎